O1-075

子どもとの接触体験による関わり方への影 響〜健康な子どもと病気を持つ子どもとの 関わり方の相違~

林田 りか

長崎県立大学 看護栄養学部看護学科

【目的】

近年、少子高齢化や核家族化の影響で、社会との関わりが 希薄化しており、そのなかで育ってきた若者達は子どもと の関わりをもつ機会が少なくなっている。そのため、子ど もに苦手意識を持つ看護学生が増え、関わり方に戸惑いを 感じる学生も多い。そこで本研究では、看護学生が子ども に対してどのような困難を感じているのか明らかにし、健 康な子どもと病気を持つ子どもとの関わり方に違いはある のか、さらに人間関係を円滑に運ぶための社会的スキルを 測定し、それが子どもとの関わりにどのように影響してい るのかを検討することを目的とした。

【研究方法】

A県の看護大学生1~4年生255名を対象とした。調査期間 は2014年7~9月。調査内容は子どもとの関わり方に関す ること、菊池が作成した社会的スキル尺度(Kiss-18)であ る。Kiss-18は18項目からなり6つの下位尺度に分かれ、合 計得点が高ければ社会的スキルが高いとされている。調査 方法は学年ごとに対象者を集め調査票を直接配布し、その 場で回収した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、 事前に研究の目的、方法、調査への参加は自由意思であり、 回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究 以外には使用せず研究終了後には処分することなどを書面 と口頭にて説明した。

【結果および考察】

調査票の回収率は82.4% (210名)であり、有効回答率は 96.2% (202名)であった。全学年の92.4%にきょうだいが おり、子どもへの苦手意識のない方が弟・妹がいる割合が 高かった(p<0.05)。子どもの対応に困難を感じる理由とし て「反応を示してもらえないとき」が最も多く、次いで「わ がままを言ったとき」、「反抗したとき」が多かった。健康な 子どもと病気を持つ子どもとの関わり方に違いがある学生 は全学年で50%以上おり、その理由として、「病気の身体へ の影響」や「病状への注意」などの『身体面』と「病気を持つ子 どもの敏感性」や「言葉や態度への注意」などの『精神面』な どがあがった。社会的スキルの比較では学年間に違いはな かったが、全体的には子どもへの苦手意識がない方がある 者より社会的スキルが高いことが分かった(p<0.05)。子 どもの不安や異常をいち早く把握するためには、遊びなど を通して積極的に関わることが大切である。コミュニケー ションに不安を感じている学生でも、子どもを理解しよう という強い気持ちを持って関わることが最も重要だと考え る。